

2021（令和3）年度 音楽鑑賞教育振興 助成研究募集 入選研究計画論文

2021（令和3）年度 音楽鑑賞教育振興 助成研究募集では、鑑賞領域の学びを中心とした音楽科教育に資する実践的な研究計画を募集し、右記の通り入選者を決定しました。入選者には2年間の研究に取り組んでいただきます。

《2021年度 実施概要》

○募集テーマ

鑑賞領域の学びを中心とした、音楽科教育に資する実践的な研究

○応募状況と入選数

応募数：7件 入選数：2件（辞退1件）

○審査基準

次の①から④までを満たす研究計画である。

- ① 鑑賞領域の学びを中心としている
- ② これからの音楽科教育に資する内容である
- ③ 授業実践による検証を伴った研究である
- ④ 研究の成果が、音楽科教育において広く普及することが見通せるものである

○選考委員

河野正幸 聖徳大学教授
嶋 英治 元福島大学特任教授
辻村哲夫 選考委員長／元文部省初等中等教育局局長
／公益財団法人音楽鑑賞振興財団常務理事

○選考専門委員

小佐野圭 玉川大学教授／全日本音楽教育研究会常任理事
加藤富美子 東京音楽大学客員教授
藤沢章彦 元国立音楽大学教授／公益財団法人音楽鑑賞振興財団理事

○審査顧問

福井直敬 武蔵野音楽学園理事長／全日本音楽教育研究会会長

○後援

全国都道府県教育長協議会
全日本音楽教育研究会
全国連合小学校長会
全日本中学校長会
全国高等学校長協会
一般財団法人日本私学教育研究所

○主催

公益財団法人音楽鑑賞振興財団

入選者	〈グループ研究〉 長崎県 長崎教科教育研究会モデラート 代表：西田 治
研究テーマ	鑑賞力を高める指導法研究 ——音楽を鑑賞することと物語文を読むことの共通点に着目して——
助成金額	500,000 円

(研究助成金額は、研究計画書とともに提出された予算書に基づき、選考委員会において決定しました。)

※本年度入選の小林美季子様(個人研究)は、やむをえない事情により、入選を辞退されました。

ご挨拶

美しい音色や楽しい楽曲は子どもたちの心にも響き、その感動は知らず知らずのうちに子どもたちの成長の糧になっていく。学校での鑑賞指導によって、子どもたちはこうした音楽の美しさや楽しさを更に深く味わうことができるようになるのです。

コロナ禍という困難な状況下においてなかなか時間の確保も難しい中、周到な準備をされて本助成研究事業に応募された先生方の、音楽鑑賞教育の充実向上にかけける熱意に敬意を表したいと思います。

本年度も、独創性に富む素晴らしい研究に助成することが決定されました。本助成研究事業が研究促進の一助になることを願ってやみません。そしてこの研究の成果が全国の学校に伝わり、各学校の音楽鑑賞教育の充実向上に活かされていくことを期待するものであります。先生方のご健闘を心から祈ります。

(選考委員長：辻村哲夫)

選 評

本年度は7件の応募がありました。ここ数年の中では多くの応募があり、先生方の研究への熱意が感じられるうれしい状況となりました。応募された先生方、ありがとうございます。

入選は2件(1件はやむを得ないご事情により辞退)でした。本誌掲載の入選1件は、音楽科の鑑賞と国語科における物語文を読むこととの共通点に着目し、相互に関連し合っって鑑賞力を高められるのではないか、というユニークな着眼点と研究方法が評価されました。

残念ながら選外になった研究計画のキーワードは「アート思考を育てる」「表現と鑑賞の一体化」「教科横断的な学び」「器楽と鑑賞を関連させる」「ICT機器を活用した音楽の可視化」でした。いずれも、日常の授業の実態・実践から出発して、よりよい授業や指導を目指そうという計画で、その中にオリジナルな解決法のアイデアも盛り込まれているものもあり、先生方の研究への意欲が伝わるものでした。

今後、応募される先生方に一つ考えて欲しいことがありました。それは研究方法です。

解決したい疑問や新しい指導法の開発があって、ある研究方法(あるいは指導方法)で実践した結果、それが解決する、または有効性が認められるという成果が立証・検証できるか、ということです。試行的、仮説的な研究内容とともに、結果を整理・考察して客観的な結論が導ける研究方法や検証方法を合わせて考えていただき、計画を作成していただけるとよいと思います。

(選考専門委員チーフ：藤沢章彦)

● 入選

<研究テーマ>

鑑賞力を高める指導法研究 ——音楽を鑑賞することと物語文を読むことの共通点に着目して——

長崎教科教育研究会モデラート

代表：西田治（長崎大学教育学部）（写真）

平瀬正賢（長崎大学教育学部）

山崎直人（長崎市立山里小学校校長）

山口亮介（盛岡大学文学部）

山里小学校 6 学年学級担任教員 4 名および音楽専科教員 1 名

※所属は入選時点（2021 年 12 月）のもの



66

1. 研究テーマ設定の趣旨

本研究の核心をなす問いは、「音楽の鑑賞の仕方と物語文の理解の仕方の共通点を指導することで、子どもたちの鑑賞力が高まるのではないか」というものである。問いの検証として、音楽科における鑑賞の活動と国語科における物語文の理解を関連させながら学習を進める指導方法を開発し、小学校において検証授業を実施し効果測定を行う。鑑賞力とは幅広い概念であるが、本研究では曲想と音楽の要素・仕組みなどを関連付けてとらえることのできる力に焦点をあて研究を進める。

先行研究については、音楽科における音楽づくりと国語科における詩の創作を関連させる総合的な授業については多数実践されてきたが（例えば西田・今道（2011））、音楽作品、物語文の指導法の共通性に着目した研究は白石範孝ら（2018）があるのみである。白石ら（2018）はその著作の冒頭で、「本書は、教科で使用す

る『用語』に類似点の多い国語科と音楽科は、汎用的能力をはぐくむうえで高い関連を持っているのではないか」という仮説の基に書かれた本である（p.17）」と記述しているように、用語の共通性とそれによって育まれる汎用的な能力について明らかにするものである。それに対し本研究は、音楽作品と物語文の理解の仕方の共通点を児童自身に理解させることで鑑賞力を上げることができるのではないかという仮説の基に、その共通点と指導法を明らかにしようとする点で異なる。よって、ここに本研究の意義が見いだせる。

音楽作品、物語文を指導する際の共通する難しさは、曖昧なものを曖昧なままにしながらも何かを足掛かりとして理解させ味わえるようにする点であろう。音楽の鑑賞でいうならば、個々の作品の美しさについては曖昧なまま（多様な感じ方を尊重しながら）、音楽の要素や仕組みを足掛かりとして理解していくことが目指され

る。それに対し、物語文でも登場人物の心情や作品の主題といった解釈については曖昧さや多様性を残しながら、記述されている文章を論拠として各自が読み深めることが目指される。ここには、大きな共通点があると考えられる。もちろん、音楽と物語文の理解では異なる部分もあるが、共通点に着目することで、作品理解の深化が望めることは、双方の教科にとって有益であろう。

子どもそれぞれに得意な教科は異なる。音楽の鑑賞が得意な子どもは、それを足掛かりとして物語文の理解を深めることができ、またその逆も考えられる。理解の仕方そのものを学ぶことは、教科を超えた汎用性の高い能力の育成に大きく寄与するものと考えられ、また、苦手意識の改善にも一翼を担うことが予測される。

加えて、マルチモーダルコミュニケーション(Multimodal Communication)の力の育成という観点からも音による作品と文字による作品の理解の仕方の共通性を明らかにすることは重要な意味を成すと考える。マルチモーダルとは複数の手段を意味するものであり、マルチモーダルコミュニケーションの力とは、音、視覚、言語などの複数の媒体で表現されたものを総合的に判断したり活用しながらコミュニケーションを行う力と捉えられる。様々な媒体で表現されたものを総合的に理解したり活用する力は、汎用的な能力およびコミュニケーション力の育成という文脈において今後より重要なテーマとなると考えられ、本研究結果はそれに寄与することができる内容であると考えられる。【注1】

2. 研究内容

(1) これまでの研究成果

音楽作品の鑑賞と物語文の読解の共通性につ

いては、これまで指導法の観点から研究を行ってきた。西田・平瀬・山崎・山口(2019)においては、音楽科における鑑賞の活動と国語科における文学的な作品を読む活動の指導法の共通点を整理し、グリーグ作曲《ノルウェー舞曲第2番》と「ごんぎつね」を例に具体を示した。続編である西田・平瀬(2021)では、その指導法の共通点を現職の小学校教員の方々へ伝える講習内容の開発・実施と効果測定を行った。

これら一連の研究は、音楽作品と文学的な作品の指導法上の共通点を教師自身が理解することを目指すものであり、研究の還元先が教師であった点に特徴がある。今回は、これらの研究成果を踏まえた上で、両者の関係性について児童自身が理解し、作品理解の力をつけることを目指すものであり、研究の還元先を児童に設定し、これまでの研究を発展させることを目指すものである。

(2) 研究内容

冒頭で示した本研究の核心をなす問いを探求するために以下2点について考察を行う。

一点目は、音楽作品と物語文の理解の仕方の共通点について明らかにすることである。この点については、上述したこれまでの研究成果により、大きくは2つの共通性があることが現状分かっている。一つは、全体と各部分を往還しながら学ぶという点である。全体をぼんやりととらえるだけでは、聴き深める・読み深めることができない。よって、部分に区切ったり、観点を設けて聴き深める・読み深めるプロセスが必要である。しかしながら、分析的に作品を理解する段階で終わらず、最終的には全体を味わえることが重要である点は、音楽作品と物語文の読解に共通している。もう一つの共通性は、

学習の対象とするのは曲想や解釈の根拠となるものについてであるという点である。音楽でいう曲想、物語文の読解でいう感想や主題は、教師の感じ方・捉え方を押し付ける部分ではなく、各児童の感じ方・捉え方に任せられるべき部分である。よって、教師が指導すべきは、児童各自がそれぞれの感じ方・捉え方の根拠となる部分についてである。その根拠とは、鑑賞では音楽の仕組みや要素であり、国語科では中心人物の変容、視点や表現技法、描写などであり、それらは音楽作品、物語文から客観的に学べる（聴きとれる・読み取れる）ものであることが共通している。本研究の2年間でさらに共通性がないかについて再検討し、精緻化する計画である。

二点目は、音楽作品と物語文の理解の仕方の共通点について指導するための指導法の開発である。本研究で開発する指導法は、研究終了後、研究校以外の様々な小学校で展開することが可能な汎用性の高いものにするため、年間指導計画への位置づけ、教材選定について配慮して計画する。また、両者の共通点を理解するのにふさわしい発達段階は小学校高学年以上であると考え、今回は小学校6年生を対象とした授業プランの開発を行う。教材については、教科書教材にこだわらず、学習指導要領に沿った形で教材選択を行うものとする。予算に計上している書籍、CD、楽譜の購入費用は、主として音楽科、国語科の教材選択にかかわる費用である。

以上2点を明らかにすることで本研究の問いについて考察を行うものである。

3. 研究方法

具体的な研究内容と方法は以下の通りである。

①音楽作品と物語文の理解の仕方の共通点について明らかにする

現段階では、前頁で記述した通り、2つの共通点を見出しているが、このほかに共通点がないかを含めて再検討するために、音楽教育を専門とする西田と国語科教育を専門とする平瀬で文献研究を改めて行い、研究成果の精緻化を図る。

②音楽作品と物語文の理解の仕方の共通点について理解できる指導法を開発する

小学校第6学年を対象とし、研究会メンバー全員で以下の概要で授業プランを開発する（具体的な題材および教材は研究が始まってから設定）。音楽科3時間、国語科3時間、共通性の学び1時間の合計7時間を使い授業実践を行う。国語科の物語文の学習を行った後に音楽科の鑑賞の活動に移行し、国語科の学習方法にあてはめながら音楽科の学習を進める流れを予定している。学習の大まかな流れは、両教科共に「作品と出会う」、「分析的に学習する」、「紹介文を書いて他者に伝える」とする計画である。ただし、上記7時間のみで児童の鑑賞力を伸ばすことは難しい。強弱、音色、リズム、反復、問いと答えなどの音楽の要素・仕組みに関する語彙の獲得を中心とした基礎となる力があってこそ効果を発揮する指導法となると考えられるため、7時間の関連させた授業に至るまでに基礎となる力の育成も合わせて行うものとする。また、長崎県では1人1台のPC（クローム Book）所有が実現しているため、それらを活用した授業デザインとなるよう計画する。

検証授業は、長崎市内の公立小学校第6学年の全4クラスにおいて実施する。国語科の物語文の読解に関する指導は学級担任教員が、音楽

科の鑑賞の活動については音楽専科教員がそれぞれ実施する計画である。

③問いの検証を行う

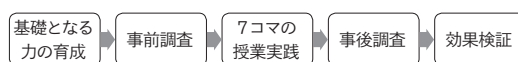
前述の①を踏まえた上で②の指導法の開発を行い、それが有効であったかについて検討するのが本段階である。ここで検証するのは、本研究の核心である「音楽の鑑賞の仕方と物語文の理解の仕方の共通点を指導することで、子どもたちの鑑賞力が高まるのではないか」という問いについてである。具体的には、次の2点から行う。

一点目は、平成24年度学習指導要領実施状況調査において、通過点が低かった鑑賞の課題「音楽を聴き、音楽の言葉を一つ以上使って紹介文を書く」を検証授業の事前事後に行い、その記述の点数がいかに変化したかについて分析を行うものである。書かれた紹介文の点数化については同調査の手法を援用し行う。授業後の結果が向上していれば鑑賞力が上がったと判断できるものとする。国語科においても同様の調査（全国学力調査の設問を参考としたもの）を事前事後に実施し効果測定を行う。

二点目は、児童を対象としたアンケート調査である。検証授業前には、「音楽作品と物語文の理解の仕方に共通点があると思うか。あるとすればどのような点か」について5件法と自由記述で尋ね、事前段階での児童らの認識について明らかにする。それに加えて、検証授業後には、「音楽科と国語科の作品理解を関連付けて学ぶことで、音楽作品が理解しやすくなったか」について5件法で調査を行う。これによって、児童自身の実感として、両者を関連付けて学ぶことが作品理解に寄与するか否かについて明らかにするものである。

以上のように、紹介文の記述から鑑賞力の向上について検証し、児童へのアンケート調査によって両教科を関連させることの効果について検証しようとするものである。これらに加え、授業担当者および参観者のコメントおよび授業分析を行うことで、単純な前後比較にならず、子どもの変容を踏まえた上での考察となるよう配慮する。授業実践から検証までのプロセスは、2年間ともに以下の流れを繰り返すものとする。

【授業実践から検証までの流れ】



なお、本研究の遂行にあたっては、外部講師として2名の専門家を各年2回招き、研究内容・方法について第三者評価をお願いする。長崎大学名誉教授・福井昭史氏には主として研究の内容面について、京都大学准教授であり教育工学を専門とする田口真奈氏には主として研究方法の側面について評価を頂くことで、研究内容・方法の両面の精度を高めるものである。

最終的には、共通点を明示するとともに、2年間の授業実践によって指導法をブラッシュアップし、公開後、多くの学校で活用できるよう学習指導案、ワークシートなどを整備し、最終報告書にまとめることで研究成果の普及に努めたい。

4. 研究スケジュール

○ 2022年度について

4月～7月の4か月間は、音楽科における鑑賞の活動と国語科における物語文を読む活動の共通点について、前年度までの研究の蓄積を生かしながら整理し、それをもとに具

体的な授業案を作成し指導方法の開発を行う。先行研究についても改めて整理をおこない、本研究課題の論点をより精緻化する。

8月～9月の2か月間は、授業者との打合せを行う。6学年4クラスを対象とし、学級担任教員、音楽専科教員と授業検討会を夏季休暇中の8月に集中して実施し、9月に最終調整を行う。

10月～11月は、プレ授業実践を行い、12月～翌3月までは児童が記述した紹介文の分析と考察を行う。

○ 2023年度について

4月～6月は、前年度の課題を整理し、2023年度の授業実践について修正を行う。7～8月に授業者と打ち合わせを行い9月～11月にかけて本授業実践と分析を行う。12月～翌1月にかけて総合的な考察を行いながら、報告書を執筆する計画である。

2022年度および2023年度ともに☆印の部分で外部講師を招いた研究評価の場を設ける。

【研究計画表】

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
2022年度	共通点の整理および授業構想☆ 先行研究の整理				授業者との打合せ		プレ授業実践		紹介文の分析と考察☆			
2023年度	改善点の整理および授業の再構築☆			授業者との打合せ		本授業実践	分析☆	総合考察報告書				

【注1】

マルチモーダルコミュニケーションの育成に関する先進的な事例としては、ミネルヴァ大学の事例があげられる (Kosslyn, S., & Nelson, B. (2017)). ミネルヴァ大学では、汎用的な能力の一つとしてマルチモーダルコミュニケーションを掲げ、音楽や視覚芸術を題材とした学びが提供されている (pp.76-86)。松下佳代 (2019) は、1990年代以降、リテラシー、コンピテンシー、21世紀型スキルといった〈新しい能力〉が教育政策において提唱され、教育実践にも大きな影響を及ぼしてきたことを指摘したうえで、「〈新しい能力〉論において特徴的なのは、「汎用的能力」あるいは「能力の汎用性」の強調であり、その傾向はとりわけ大学教育において顕著であると示唆し (p.67)、その中でもミネルヴァ大学は徹底した形で汎用的能力の教育を行っている大学であると述べる (p.69)。小学校教育においても、音楽科、国語科の分野固有性を重視しながらも、それらを超えた部分で共通する汎用的な能力の育成について実践・考察していくことは今後より重要な課題となるだろう。

【引用・参考文献】

- 白石範孝ら (2018) 『国語科×音楽科の教科横断授業—共通「用語」で汎用的能力を育む』学事出版
- 西田治・平瀬正賢 (2021) 「小学校音楽科と国語科の共通点に関する一考察 (2) —現職教員対象の講習内容開発と実施—」『長崎大学教育学部教育実践研究紀要 (20)』 pp. 21-32.
- 西田治・平瀬正賢・山崎直人・山口亮介 (2019) 「小学校音楽科と国語科の共通点に関する一考察 (1) —「鑑賞」と「読むこと」の指導法に着目して—」『長崎大学教育学部教育実践研究紀要 (18)』 pp. 107-119 出版後に訂正
- 西田治・今道真名 (2011) 「五感で感じることを起点とした創作活動の実践—小学校における音楽科と国語科の連携」『音楽教育実践ジャーナル vol.8 no2』 pp.116-127. 日本音楽教育学会
- 松下佳代 (2019) 「汎用的能力を再考する—汎用性の4つのタイプとミネルヴァ・モデル—」『京都大学高等教育研究 (25)』 pp.67-90.
- Kosslyn, S., & Nelson, B. (2017). Building the Intentional University: Minerva and the Future of Higher Education. MIT Press.